

## 平成30年度 第97回全国高校サッカー選手権大会千葉県大会 総評

平成30年7月22日から8月2日の日程で1次トーナメントが、10月20日から11月18日の日程で決勝トーナメントが行われ、6年連続で流通経済大学付属柏高等学校と市立船橋高等学校の決勝戦となり、流通経済大学付属柏が勝利し、2年連続で全国大会への切符を手にした。

7月22日から始まった1次トーナメントでは、異常気象とも言われる酷暑だったこともあり、クーリングブレイクをいかに活用するかといった、サブメンバーやマネージャーを含めたベンチワークも重要なものとなった。水分補給を行いながら戦術的確認を行えるチーム、身体を休ませるので精一杯のチームなどクーリングブレイク後に試合の流れがガラッと変わるなど、来年度に向けての課題となったチームもあるだろう。21ブロックに分かれたこのトーナメントではシード校が順当に勝利を収めたが、ノーシードから千葉東、袖ヶ浦、芝浦工大柏、東海大市原望洋の4校が決勝トーナメントに駒を進めた。

10月20日から始まった決勝トーナメントでは、1次トーナメントを勝ち上がった21校とシード校の8校の29校で、近年の流経大柏と市立船橋の2強の牙城を崩せるチームが現れるかという期待のもと行われた。どのチームも対戦相手の試合を研究し、対策を立てて試合に臨んでいた。その甲斐もあり、ディフェンス面においてはやることははっきりしているために、状況に応じて前線から守備を行ったり、リトリートしてブロックを形成して守備を行ったりと、相手の攻撃の自由を奪い、大きく崩れるといった試合はなかった。その反面、オフェンスにおいては課題を残した。自チームの攻撃を研究・対策してきた守備に対しての打開策が、物足りなく感じてしまった。チームで積み上げてきたものが対策され通用しなくなったときに、個の能力や2、3人のグループでの発想力・想像力が乏しかった。相手のブロックをドリブルでこじ開けたり、ダイレクトプレーを入れてリズムを変えてみたり、パススピードを変えてわざと相手を食いつかせたり、相手の嫌がるポジション取りを常にしたり、ファーストタッチの置き所を変えてみたりと、あげればきりが無いが、個人の発想力・想像力がチーム戦術の中に埋没してしまっているシーンが多く見られた。これからはチーム戦術プラスアルファで、対応してきた相手を逆手にとって、相手はもちろんのこと見ている人をもだます想像力あふれる選手の育成が必要であろう。そのためにも、指導者はもちろんのこと選手自身も、自分のプレイの引き出しを増やすために自分自身を研究し、さらに高いレベルでやるために個人の様々なスキルを磨いていかなければいけないと感じる。来年度はこの2チームはもちろんのこと、様々なチームからそういった想像力あふれる選手が現れてくることを期待する。

この大会は会場・役員・審判・補助学生など多くの方々の協力のおかげで無事に終わることができた。運営に携わってくださった方々に感謝の意を表すとともに、流通経済大学付属柏の昨年度を上回る全国優勝を期待し、総評としていただく。

千葉県立船橋啓明高等学校 上芝 俊介